



図書館通信

最上校図書委員会 No.9 7月12日

7月図書館企画 第171回 芥川賞・直木賞 候補作決定!

7月17日、東京において、選考会が開かれます。

どの作品が選出されるか、予想してみましょう。

※芥川賞候補作 5作品

『サンショウウオの四十九日』 朝比奈秋著 ※初候補

最も注目される作家が医師としての経験と驚異の想像力で人生の普遍を描く、世界が初めて出会う物語。

『 転の声 』 尾崎世界観著 ※2回目

俺を転売して下さい。喉の不調に悩む以内右手はカリスマ”転売ヤー”に魂を売った!? ミュージシャンの心裏を赤裸々に描き出す。

『 海岸通り 』 坂崎かおる著 ※初候補

海辺の老人ホームに集う女たちのゆるやかなつながり。さまざまな人物が、正しさとまちがい、本物とニセモノの境をこえて踊る、静かな物語。

『いなくななくならないうで』 向坂くじら著 ※初候補

高校時代に死んだはずの親友・朝日。時子はずっと会いたかった彼女からの電話に驚喜するが、「住所ない」と話す朝日が家に住み着き――。

『バリ山行き』 松永K三蔵著 ※初候補

会社の付き合いを避けてきた波多は同僚に誘われるまま六甲山登山に参加する。波多も親睦を図る気楽な活動をしていたが、職人気質で変人扱いされているベテラン社員妻鹿に、危険で難易度の高い登山、バリ山行に連れて行ってもらうと……。

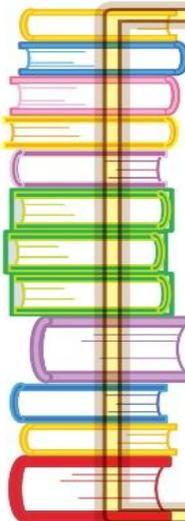


『われは熊楠』 岩井圭也著 ※初候補
野放図な好奇心で森羅万象を収集、記録することに生涯を賭した、知の巨人の型破りな生き様が鮮やかに甦る!

『あいにくあんたのためじゃない』

柚木麻子著 ※6回目

いまは手詰まりに思えても、自分を取り戻した先につながる道はきっとある。この世を生き抜く勇気がむくむくと湧いてくる、全6篇。



長期貸出のお知らせ

7月22日(月)～8月27日(火)まで、図書館から本を5冊借りることができます。夏季休業中に読む本をぜひ貸りてください。

夏季休業：7月29日(月)～8月26日(月)

冊数：2冊 → 5冊



夏休みにオススメの新刊!



『ブラック・ショーマンと覚醒する女たち』 東野圭吾著



謎に包まれたバー「トラップハンド」のマスターと、彼の華麗なる魔術によって変貌を遂げていく女性たちの物語。

『八秒で跳べ』 坪田侑也著



自分の居場所が見つけれず、前に進めずにいるふたりの想いは交差しながらも、遂にクリスマス前夜に止まっていた時間が流れ出す。

『そしてレコードはまわる』 ヤマモトショウ著



アイドルの失踪騒動、デビューの意思を持たない天才ストリートシンガー。音楽を愛する全ての人におくる、音楽業界連作ミステリー。

『水脈』 伊岡瞬著



豪雨で流されてきた遺体。それは殺人事件の始まりにすぎなかった。この事件は濁流のひとつにすぎない。地底には、見えない水路が無数に広がっている。

『怖いトモダチ』 岡部えつ著



16人のさまざまな証言をもとに、女の正体にせまる。女はいったい何者で、なぜ嗅ぎ回られているのか? 読めば読むほど謎が深まり、ゾットするラストは頭から離れない。

『川のある街』 江國香織著



はかなく移りゆく、濃密な生の営み。人生の三つの時間を川の流れる三つの場所から描く、生きとし生けるものを温かく包みこむ慈愛物語。

『国家を作った男』 宮内悠介著



ジョン・アイヴァネンコがアメリカンドリームを掴むまでに一体何があったのか、そしてそれでも拭い去れなかった孤独の影にあったものとは。その生涯を描いた一遍をはじめ、13篇を収録。

『方舟を燃やす』 角田光代著



飛馬と不三子、縁もゆかりもなかった二人の昭和平成コロナ禍を描き、「信じる」ことの意味を問いかける傑作長篇。

『殺める女神の島』 秋吉理香子著



リゾートアイランドに集められた、外見と内面の美を競い合うコンテストの最終候補者。主催者が、二日目の朝、瀕死で見つかった。次々と殺人が起きるなか、巧妙に隠された参加者たちの「嘘」も明らかになっていく。この中で、一番嘘つきの殺人鬼は誰?

最高に後味の悪いイヤミス長編!

『サロメの断頭台』 夕木春央著



天才芸術家の死、秘密を抱えた舞台女優、盗作事件に贖作事件、そして見立て殺人。未発表の絵を、誰がどうして剽窃したのか? 盗作犯を探すうちに、井口の周りで戯曲『サロメ』に擬えたと思われる連続殺人が発生して?

『しんがりで寝ています』 三浦しをん著



いくらなんでもアホすぎる一冊に仕上がってしまったが、本書をお読みになるあいだ、もし少しでも楽しい気持ちになっていただけたなら、うれしいです。

『アルプス席の母』 早見和真著



主人公は選手から母親に変わっても、描かれるのは生きることの屈託と大いなる人生賛歌! かつて誰も読んだことのないまったく新しい高校野球小説が、開幕する。

『板上に咲く』 原田マハ著



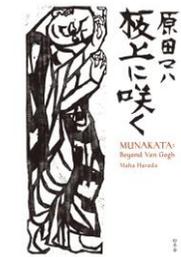
墨を磨り支え続けた妻子ヤの目線から、日本が誇るアーティスト棟方志功を描く。感涙のアート小説。

『ここはすべての夜明けまえ』 間宮改衣著



何もかも手遅れで、何もかも破綻していて、だからこそ優しく。約100年前、身体が永遠に老化しなくなる手術を受けるときに提案されたことだった。

『spring』 恩田陸著



稀代のストーリーテラーが辿り着いた最高到達点=バレイ工小説。

※ぜひ、図書館へ